

多様性と序列

18 世紀の人類学者ペトルス・カンパーをめぐる

民族的区別 *distinction* の言説の諸相

吉田 耕太郎

民族や国民という区別をめぐる言説が、歴史上のある特定の時期に現れたものであるように、それら民族や国民間の序列という言説もまた、ある時期に突如として形成された産物の一つに違いない。当論文では、この民族間の序列に関する言説の形成とその歴史的局面を、18 世紀の人類学において行われた民族の完全性・民族の美しさをめぐる論争において確認してみたいと思う。この民族間の序列という言説は、例えば日本人は優れているとか、ヨーロッパの文化は優れているなどの形をとって日々産出されている言説である。現代の思想的状況では、このような言説を構成している民族という区別そのものや、その序列を計る基準それ自体が問われており、この種の言説は批判的に扱われていることは言うまでもない。しかし当論文ではこの種の言説に対する批判的検討は意図されていない。むしろ、このような民族の序列という言説がどのような形で生じてきたのか、その一局面を確認することをここでの問題とする。

このような民族間の序列という言説が成立する為には、おおまかに以下の3つの構成線が必

要になることをあらかじめ指摘しておきたい。まず第一に序列として比較されるべき諸項―諸民族―の確定、第二に序列を確定する為の基準―美・完全性―の確立。そして第三にこの基準にそって諸対象を序列付ける際に働く力・制度・思想状況、別の言葉で言えばこの両者を結び付けて序列の言説を形成させる大きな意味での言説の条件である。もちろんこの三つの構成線は厳密に区別されるものではない。それらは互いに独立している場合もあるし、互いに互いを産出することもある。そして言うまでもなくこの構成線の特定作業は非常に困難なものである。とはいえ、この18 世紀の人類学という学問領域において序列の言説として言及された民族的区別、民族的違いを考察するに際しては、この三つの構成線を念頭においておくことが有益であり、特に第一の線に着目することが重要になるように思われる。というのも、この時代に民族という違いが、違いとして、つまり比較されるべき諸項として浮かび上がってきたからである。この事情を当論文では18 世紀の人類学者を扱った一冊の本 Miriam Claude Meijer, *Race*

*and Aesthetics — In the anthropology of Petrus Camper (1722-1789)*¹を中心に確認することにした。

* * *

まずこの本がどのようなコンテキストにおいて執筆されたものなのか、本の内容と共に簡単に確認しておきたい。ここで扱われている人類学者ペトルス・カンパー Petrus Camper は、80年代に行われた民族主義的言説の一連の批判作業において、西洋の民族主義の祖として位置づけられた人物である(p.2)。カンパーは解剖学を修めた医者・大学者（解剖学教授）である。後に解剖学の父とも呼ばれることになる若きブルーメンバッハとも個人的に交流を持ち、彼に大きな影響を与えた。カンパーはその解剖学の専門的知識をもとに、様々な民族を実験的・観察的に研究した他、同時に画家でもあり、解剖学の知識を利用した人間の描写方法に関する執筆や講義も行っている。当時の国際都市アムステルダムという場所でこそ可能であった猿・オラウータンをはじめとする様々な民族の頭蓋骨の解剖学的比較研究を行う過程で、カンパーは、フェイシャルアングル（カンパー自身はフェイシャルライン *linea facialis* と名付けていた）を、

これらの違いを示すに足る尺度として発見した(p.18)。

フェイシャルアングルとは、頭部を側面から見た上顎と下顎の幾何学的骨格位置関係を示すものにすぎない。問題はカンパーによるこのフェイシャルアングルの示し方にある。カンパーはこのフェイシャルアングルを、猿を一方の極とし、オラウータン、黒人、西洋人、そして他方の極をギリシャ人（彫刻）とする一覧表の形で展開した²。勿論彫刻には骨格はない。カンパーはギリシャ人の彫刻の骨格を想像して描いているのだが(p.108)、この表は、解剖学的見地に基づいた猿に始まりギリシャ人を終点とする、その時代に問題となったある違いを総覧する表となっているのである。このようなカンパーのフェイシャルアングルが、民族的違いを特定するものとして機能することは容易に察することが出来るし、実際に黒人を猿に近い劣った民族という民族間の序列の言説を産み出す際の科学的根拠にもなり得たのである(p.123)。それ故、フェイシャルアングル、そしてそれを発見したカンパーは、民族・人種主義的言説の創始者と位置づけられることになった。

このような評価に対し、カンパーの人種主義の創始者というレッテルを剥がすことを著者は

¹Miriam Claude Meijer, *Race and Aesthetics - In the anthropology of Petrus Camper, 1722-1789*, (Rodopi, 1999)

これはアムステルダムのロドリゲス社から出版されているオランダ思想史叢書の一冊である。この叢書の中には、デカルトの『精神指導の規則』の最新校訂版や、近世の代表的アリストテレス学者でありスピノザの哲学諸概念にも大きな影響を与えた、ブルガースダイク Burgersdijk の論文集等がある。
なお、本文中の (p. 数字)は、上記叢書からの引用頁を示す。

²啓蒙期における見えない微細なもの、見えない内面へと視線が注がれたことは有名であるが、その際イラストという形でモノを並列に配置し、それらの違いを総覧するという傾向は、デカルト以来大きな重要性を持っていた。

目的としている。確かにカンパーはフェイシャルアングルという民族的違いを示す指標を発見しその序列を主張した。しかし彼自身は民族的違いを特定したり、民族間の序列を主張していないというのである。つまりカンパーを民族主義と結び付けるのは単なる誤読であり、カンパーの議論を当時のコンテクストにおいて正しく解釈することが著者が企てる戦略ということになる(p.5)。

多様性

カンパーのフェイシャルアングルの本来の目的は、人間の多様性を表現することであった。これが、カンパーを当時のコンテクストにおいて解釈することによって明らかになる点であり、著者が序列とは違ったものとして強調する論点である。つまり、猿からギリシャ人へといたる一覧表の形で示されたフェイシャルアングルは、それら序列を伴った区別・違い graduation を主張する為のものではなく、地上に住む動物・人間における多様性 variety として示すものであったというのだ(原文は showing the range of variability in human populations)(p.52)。著者は、カンパーの多様性を、自然神学との関連で次のように敷衍する。

自然神学とは、被造物に関する知は同時にその創造者である神の知を意味すると主張する立場、いわば当時の経験主義的自然科学探究と、依然として影響力を持っていた広義のキリスト

教権力との一致をはかった立場である(p.11)。自然神学的立場によれば、被造物の多様性は神の全能を示すものであり、逆に全ての被造物は全能の神によって創造されたものである以上、それぞれ完全なものである。それ故、自然神学においては、各々の被造物においてみられる区別とは、その欠陥や不完全性を示すものではなく、神によって与えられた目的に由来するものと理解される。つまり被造物は平等に完全であり、被造物に見られる区別は、序列ではなく神の目的の多様性を示すものとして捉えられるのである。劣った被造物と考えられている動物が人間よりも強い力を持つことや、昆虫の複眼の機能についてカンパーが議論していることから、彼が自然神学的立場に基づく自然の多様性を主張していたことがわかるだろう(p.52)。

このカンパーの多様性の意義は、例えば黒人という語が奴隷を意味するようになったり、黒人を奴隷として利用することを正当化するような言説が数多く産出された当時の社会的状況の中では、まさに反序列を志向するものであったことは言うまでもない。

しかし、一体何故このような反序列を目指すカンパーが、民族主義的言説の祖として位置付けられることになったのであろうか。そしてこの多様性が民族の序列とはどのように異なるといえるのか。このような問が提起されるのは当然のことのように思われる。カンパーを民族主義という評価から救おうとする著者にとって、こ

の間に答えることが必要になる。そして著者はこの間に対し、カンパーの多様性概念が序列の言説に利用されてしまったという形で議論を展開する。

序列：完全性と美

体系的ではないが、多様性が序列へと移行される原因として以下の2点を著者は指摘している。

第一の原因は存在の連鎖の思考である。これは、中世から18世紀に到るまで一般的に受け入れられてきた世界観であり、魂を持たない石にはじまり植物、動物、人間を経て、神へと到る連続的世界観である。この存在の連鎖で重要なのは、神を頂点とするヒエラルキーを形成しているという点である。つまり神の創造により与えられた、本性・本質の完全性に基づくヒエラルキーである。神に近ければ近い程、被造物はより完全になる。18世紀の民族学において存在の連鎖が重要な意義を有するのは、存在の完全性に基づく連続的なヒエラルキーから、人間と動物の中間種の存在、つまり同じ人間の中にも動物に近い劣った人間が存在していると考えよう促し、実際このような劣った人間を特定することへと向かわせたという点である。このような思想的前提から、動物の側からはオラウータンが動物と人間の中間種として、人間の側からは黒人が動物と人間の中間種として、位置付けられることになる。この存在の連鎖というヒ

エラルキーの思考が、猿からギリシャ人へと示したカンパーのフェイシャルアングルと結びつくことは容易に理解出来るだろう。ここで猿からギリシャ人への一覧表の形をとったカンパーのフェイシャルアングルは、多様性ではなく序列を主張するものへと読み替えられることになる。

例えば観相術 *Physiognomy* で有名なヨハン・カスパー・ラファテルは、この接続を実際に展開した人物の一人である。カンパーは、自らの発見したフェイシャルアングルについて個人的にラファテルに伝えた。その手紙についてラファテルは著作の中で言及する——これがカンパーのフェイシャルアングルについて初めての公的反応である。しかしラファテルのフェイシャルアングルの紹介の仕方は、存在の連鎖の思考の一つとして位置付けるものであった³。

カンパー自身はこのような存在の連鎖の思考に対して批判的見解を述べていた。例えば人間に形が似ている猿が人間に次ぐ被造物と序列付けられている点からも分かるように、存在の連鎖とは、人間を中心とした外的形態の類似性に基づいて人間自身が作り出した序列でしかないとカンパーは批判している(p.49)。

³ ラファテル Johann Kaspar Lavater は、まず *Physiognomische Fragmente, zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschenliebe* (Leipzig, 1775-1778) の中で、カンパーからの手紙について言及している。死後出版された *J. C. Lavaters nachgelassene Schriften* (Zürich, 1802) において、カンパーのフェイシャルアングルは、存在の連鎖を証明しようとした試みの一つとして位置付けられることになる。この事情の詳細に関しては、以下を参照。cf. Meijer, op. cit., pp. 118-120.

フェイシャルアングル⁴についての同様の読み替えはカンパーの美学講義においても行われている。ブロース・ファン・アムステルによるアムステルダム・ドローイングアカデミーで行われた講義の報告において、フェイシャルアングルは、動物だけではなく個々の民族（国民）（原文は the differences among Animals, but also that of the particular Nations）の区別をも示すものであり、これはより美しいものへの段階的な序列を示すものであると、より明確に言及されることになる⁴。

上記の例で示されるように、第二の局面として著者が論じるのは、当時支配的であった古代ギリシャを芸術美の頂点とする美的価値観である（p.107, p.159）。ここで念頭に置かれているのはヴィンケルマンらの芸術・考古学分野における古代芸術評価の動向のことである。ヴィンケルマンは、古代ギリシャ芸術を美しさの根源的な理念の体現と捉え、この美しさを頂点に各時代・地域における芸術作品の体系化いわば通覧を試みたのである。これは美しさという基準の創造であり、ヴィンケルマンにとって個々の芸術作品はそのギリシャ芸術に体現されている根源的美しさをそれぞれの仕方で反映しているも

のとして整理される⁵。また制作的側面においても、芸術作品とは美しいものをその最適の配置で構成すること、つまり完全としての美を構成することが目的であった。例えば、カンパーの解剖学の教師でもあったアルビヌス Bernhard Siegfried Albinus においても、解剖学のデッサンはそのままの意味での自然を描写することではなく、理想的美が求められていたのであった（p.159）。ここにギリシャ芸術を頂点とする序列的価値観が働いており、この美的価値がカンパーのフェイシャルアングルの一覧表に結びつくことになる⁶。

カンパーはこのような美的価値についても批判的態度を取っていたと著者は指摘する。ヴィンケルマンの美の概念は単に視覚上の美しさに基づいているだけだ、という批判をカンパーは実際行っている⁷。カンパーにとって、美的価値は相対的なもの、それぞれの受け手によって異

⁵ Vgl., Markus Käfer, *Winckelmanns Hermeneutische Prinzipien* (Carl Winter Universitätsverlag, 1986) S 36-38.; cf., George L. Mosse, *The Image of Man* (Oxford University Press, 1996) pp. 29-39.

⁶ またマイヤーは、カンパーの身体的美についての講義の英語訳にまつわるエピソードについても触れている。その内容は、カンパーの美に対する相対的な評価についての論文が当時翻訳されなかったということである。この原因として、著者が指摘するのは、カンパーの相対的美の主張が、エドモント・バークの思想と同じものとして受け取られていたということである。バークも均斉や完全性による美の根拠付けに対して批判を行っていたが、その当時カンパーの思想は少なくともイギリスでは、バークと同様の主張と受け入れられていたということである。

⁷ ヴィンケルマンに対するカンパーの態度は微妙である。たとえば、下記文献箇所での議論等を参考する限りでは、カンパーのフェイシャルアングルは、ヴィンケルマンによって示されたギリシャ古典芸術の理念的＜美＞概念を科学的に根拠付ける試みとも解釈出来る。Vgl., Peter Camer, *Über den natürlichen Unterschied der Gesichtszüge in Menschen verschiedener Gegenden und verschiedenen Alters: über das Schöne antiker Bildsäulen und geschnittener Steine*, (Berlin, 1792, übersetzt von S. Th. Sommering) S. IX-X.

⁴ Cornelis Ploss van Amstel, 'Auszüge aus zweyen in der Amsterdanner Malerakademie gehaltenen Vorlesungen' in: Petrus Camper, *Sämmtliche kleinere Schriften die Arzney-, Wund- arzneykunst und Naturgeschichte betreffend* Bd. I (Leipzig, 1748); cf., Meijer, op. cit., pp. 95-96. なおこの該当箇所を参照することは出来なかった。

なる相対的な価値判断であって、ギリシャの美のような客観的な基準はない。美的価値とは習慣や教育によって成立するものであって、慣れ親しんだものに美しさを感じる。それ故、ヨーロッパ人は慣れ親しんだ白い肌を美しいと感じ、反対に黒人の黒い肌に醜くさを感じるのは、慣れていないことが原因であるとして、このような序列的な美的価値観を批判するのである(p.164, p.181)。

違い

カンパーの多様性概念は、存在の連鎖、及びギリシャの美を頂点とする序列言説へと利用された。上記で確認した議論から、民族主義というレッテルを剥がそうとする著者の目的はある程度成功しているだろう。とはいえ先行研究が示すように、当時の思想的交流関係やカンパーの著作を見れば、カンパーのフェイシャルアングルが、序列の言説に一方的に利用されたと断定するのは難しい。問題はこのような著者マイヤーの整理によって隠されてしまう当時の思想的状況であろう。つまりこのカンパーの多様性概念が序列の言説と結びつく、当時の思想的状況が問題なのである。当時の思想的状況に視域に入れようとするならば、ここでは方向の異なる二種類の言説について確認したことになる。つまり人間における違いを完全性や美しさという基準でもって序列的に固定しようとする言説と、その違いを序列ではなく多様性として扱う

言説の二つである。

ここであらためて、著者マイヤーが考察しなかった論点を確認することが出来る。つまり多様性と序列という異なる方向を目指す二つの言説が接続可能であったということである。このような二つの言説を結び付ける接点として機能しているのが、当時の経験主義という方法である。

カンパーの経験主義は、当時ライデン大学の教授陣を中心にすすめられていたイギリス経験主義的・ニュートン的な方法に大きな影響を受けている。ジョン・ロックをはじめとするイギリス経験論者に顕著なように、観念・感覚二元論を前提とし、経験を観念の唯一の源泉とする立場をカンパー自身も主張している⁸。しかしこのような経験の重視は、伝統的な知の枠組みを変更する意味を有していた。イギリス経験論の代表的哲学者、ジョン・ロックを例として確認してみよう。

物体の知においては、私達は、実地経験から得られうるものを拾い集めることに甘んじなければならぬ。というのは、私達は、物体の実在の本質の発見によって（物体についての）束を一掴みに出来ない、つまり種全体の本性と属性を一まとめにして了解出来ないからである。

(…中略…) 経験、観察、自然事象記述が、我々

⁸ カンパーは、人間の顔の表情を心の現れと主張する等、魂の側から体への通路もほのめかすような主張をしている。これはラファエルに代表される観相術に通じる傾向であろう。

の感覚によって、少しずつ、物的実体の洞察を私達に与えるに違いないのである⁹。

認識論を扱った主著『人間知性新論』の引用からも分かるように——細かい用語の区別はここでは問題としないが——、ロックは、本質や種¹⁰という概念の実在性に対して批判をしている。それに代わりロックが重要視するのは経験や感覚である。これはつまり、本質の知ではなく感覚から得られる様々な性質、いわば属性についての知を重要視する立場であった。そしてこのような立場には、区別・違いに関する伝統的な体系の破壊と、それに代わる新しい体系の構築が企図されている。例えばロック、ヒュームの哲学において確認出来る観念の違いおよび観念間の関係についての総覧的定義は、新しい知の体系構築の試みとして解釈することが出来る。そしてこのような違いに関する新たな体系の模索は、カンパーの身近な人物においても確認することが出来る。代表的な人物はビュフォンであろう。彼の一連の仕事は被造物の新たな体系化を目指す壮大な試みではなかったか¹¹。カンパーをはじめとする同時代人が直面していた枠組みの混乱を示す次のような主張——著者マイヤーはカンパーの多様性を補強する議論として紹介しているのであるが——を紹介したい。

カンパーと同じような多様性を主張した同時代人ラムゼイ James Ramsay による序列思考への批判は、経験主義によってもたらされた枠組みの変革を哲学的に次のように簡潔に述べている。この批判は、ジョン・ハンター John Hunter¹²が皮膚の色に基づく人間の序列を主張したことに對して発せられたものであった。ハンターの序列を志向する言説は、類を無視して、その属性だけを考察したものである。これがこの批判の中心となる主張である¹³。この批判で前提とされているのは、属性は常に実体において存立するものという伝統的な範疇論である。人間という類（実体）の属性としての皮膚の色は、属性である以上人間という実体の違い（属性）を示すものでしかない。しかしその色が、実体を離れることによって、属性が属性以上の価値を、つまり実体的な価値を持つことになる。このような皮膚の色の違いによって異なった実体としての人間を考えることは、属性の類からの切り離しであり、それは類一種という伝統的な範疇論の枠組みによれば誤ったものであるというのだ。

このような哲学的術語を利用することで、序列と多様性の違いを次のように表現することも出来るであろう。つまりカンパーが強調する多

⁹ John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, Book IV, chap. XII, §12.

¹⁰ 属性が帰属する上位範疇のことであるので類と置き換えることは可能であろう。

¹¹ ここで、ミシェル・フーコーをはじめとする、知の変化に関する諸考察を念頭に置いていることは言うまでもない。

¹² 後で触れることになるが、彼は、カンパーと同じようなフェイシャルアングルを発見し主張した人物の一人である。

¹³ James Ramsay, *An Essay on the Treatment and Vicerion of African Slaves in the British Sugar Colonies*, p. 187; cf., Meijer, op. cit., p. 114.

様性とは、属性としての多様性であって、それはあくまでも上位範疇の類（人間）との相関関係においてのみ維持しうるものであった。カンパーの多様性とは、人間という共通の類概念を前提とした上で語られるものである。それに対して序列は、この類としての人間の共通性が欠けている。つまり民族という属性の違いを類の違いとして表現することで、人間の違いを主張しているのだ。しかし重要なのは、このような類——種の談義ではなく、類や種といった額の枠組みが不安定になってきた当時の状況であり、新しい属性の違いが属性を超えた違いとして自明となってきたということである。

つまり経験主義は、一方で多様性という形で新たな違いに着目することを可能にしていると同時に、伝統的な知の整理の枠組みを破壊しているのである。この意味で新たな分類としての序列的言説が成立する為にも経験主義は重要な役割を果たしていたのである。

そしてこのような視点から多様性と序列の言説を眺める時、双方の言説もこの新たな区別・違いへの取り組みと捉えることが可能になる。つまり今日民族や人種という言葉で語られるような人間の違いへの取り組みが、カンパーの時代に行われたのだ。この時代は、これまでの安定した知の枠組みが壊れ、人間における違いが問題となった時代なのである¹⁴。宗教的な側面

から概観しても同じような状況が確認出来る、カンパーと同時代またその以前においては、ヨーロッパ外の人間は、その神の理解可能性を中心的問題として語られることが多かった。その当時議論の中心となっていたのは、彼等が同じ被造物である人間という前提のもとで、彼等は理性を有しているのかどうか、そしてキリスト教つまり神を理解することが出来るのかどうかについてであった¹⁵。しかし同時に、例えばヨーロッパ外の国に関する一連の記述も、聖書に基づく解釈の記述から科学的な記述へと変化してきたことにも確認出来る¹⁶ように、異なる人間としても現れはじめていたのである。ヨーロッパ以外の人間は労働力・奴隷として売買される商品や見せ物としても取り上げられるようになり、それに応じてこのような状況を正当化するような言説が多く産出されるようになった¹⁷。そして当の神学においては、多元発生論者のような民族の違いを肯定する言説が現れてくることに

自体が問題となったことは言うまでもないであろう。つまりカンパーも属する今日にも通じる人類学の成立である。

¹⁵ 例えば、中国人の神の理解可能性に関する議論は、(ドイツ)啓蒙哲学において大きな意味を持っていた。また当時の神学における議論の概略に関しては以下を参照。Vgl., Michael Abbrecht, 'Einleitung' in: Christian Wolff, *Oratio de Sinarum philosophia practica* (Felix Meiner Verlag, 1985); cf., Daniel J. Cook and Henry Rosemont, Jr., 'Introduction' in: Gottfried Wilhelm Leibniz, *Writings on China* (Open Court, 1994); Julia Ching and Willard G. Oxtoby (eds.), *Discovering China* (University of Rochester Press, 1992).

¹⁶ Vgl., Urs Bitterli, *Die «Wilden» und die «Zivilisierten»* (Ex Libris, 1977) S.24-35; このような問題を扱った最近の論文としては、鄭栄龍『共鳴と連鎖』 in: *iichiko intercultural*, Number 66 Spring 2000 (Edition iichiko), pp. 81-101 またこの本でも触れられているが、オラウータンについての記述も、聖書的な説明から科学的な説明へと変化している。cf., Meijer, op. cit., pp. 127-136.

¹⁷ Vgl., Georg Lilienthal, "Samuel Thomas Sömmerring und seine Vorstellungen über Rassenunterschiede", in: Gunter Mann, Franz Dumont (Hg.), *Die Natur des Menschen* (Fischer, 1990) S.33.

¹⁴ もちろん、ここでは論じないが、所謂キリスト教的世界観の揺らぎに伴い、人間の位置付けが揺らぎ、人間というもののそれ

なる(p.65, p.81)。この説は、ヨーロッパ以外の人間の祖をアダムとイヴ以外に求めるものであり、民族の違いを神による創造の時点での違いとして固定化する試みであった。

そしてこの時期このように人間の違いが違いとして扱われるようになったという状況は、例えば、ドーベントン Louis Jean Marie Daubenton やジョン・ハンターを始めとする同時代人が、カンパーのフェイシャルアングルと同じような説を同時期に主張し始めることから十分伺うことが出来るし¹⁸、そしてなによりもカンパーが実際に自らのフェイシャルアングルを示す際に、ヨーロッパ人、黒人、猿、彫刻という区分を利用している¹⁹ということが、その当時このような区別が自明となっていたことを示すなよりの根拠であるように思える。

カンパーの議論を当時のコンテキストの中で解釈することによって明らかになるのは、著者マイヤーの意図とは異なり、今日の民族にあたるような新しい人間の区別・違いが様々な言説の中に現れてきたという状況である。そしてカンパーは、この区別を多様性として整理し、また他の者は存在の連鎖や美的基準との関連で整理したということである。重要なのは、双方の言

説が移行可能である程、同じような違いが双方の言説において問題になっていたということである。この新しい区別が、区別として現れ、そして当時の学問に対して、その位置づけを迫っていたということなのである。

カンパー以後、解剖学・人類学の分野ではブルーメンバッハ、ゾマーリングらの主張が支配的になり、人間の違いを多様性として固定する言説は表に出てこなくなる。つまり多様性を求めるカンパーの言説は、そのものとしては受け入れられることなく、また序列の言説へと利用されることもなくなる。

確かにゾマーリングは、明らかな民族的区分とその序列を求め、様々な根拠を利用して民族的序列の言説を産出しようと試みた(p.173～p.175, p.180)。その際カンパーのフェイシャルアングルも、この序列を主張する一つの根拠として利用されることになる。しかし例えばコーカサスの女性の美しさをめぐる言説で有名なブルーメンバッハにおいては、序列的な言説は行っていないものの、民族的違いを地理に関連して産出した。ブルーメンバッハによるこのような民族の固定化の仕方は、今日我々が意図せず産出してしまいう地域と民族とを結び付ける言説にも大きな影響を与えているものである。しかし

重要なのは、民族を地理に結び付けるブルーメンバッハにとって、カンパーのフェイシャルア

¹⁸ 例えば著者はここで、これらの影響関係について幾つか指摘をしているが断定的な結論は導かれていない。この点も、この種の言説が同時期に突如として産出されはじめたことを示すことになるのではないだろうか。cf., Meijer, op. cit., pp. 110-114.

¹⁹ 例えば下記頁の表など。

Vgl., Peter Camer, *Über den natürlichen Unterschied der Gesichtszüge in Menschen verschiedener Gegenden und verschiedenen Alters; über das Schöne antiker Bildsäulen und geschnittener Steine*,

(Berlin, 1792, übersetzt von S. Th. Sömmerring) S. 55.

ングルは、その民族的区別を示すにはもはや不十分なものとなっているということである。実際彼は、フェイシャルアングルでは民族の違いが上手く説明出来ないと、カンパーを批判する。既にこの時点で、カンパーらが見ていた人間における多様性や序列は、ブルーメンバッハには見えないものとなっているのである(p.168～p.171)。

* * *

上記の議論を整理しつつ、カンパーの多様性概念の意義について簡単に触れておきたい。

人間の思考は、違い・区別というものをどのように取り扱うのであろうか。違い・区別は確かに序列思考として産出される。しかし区別そのものを批判し、それを回避する為に区別を否定するような方向に向かったり、人間の抽象能力を評価する程事態は単純なものではない。というも、このような区別をなくそうとする言説は、区別を無視した均一性をもたらす抑圧としても機能するからだ。そして第三の道を指し示すかのように見えるカンパーの多様性の言説も、一ここでは類一種という哲学史的な概念を用いて説明したが一必ずしも成功しているとは言えない。多様性の言説をそもそも可能にする上位範疇の問題性に関しては、別の機会に議論したい。区別がどのようなものとして現れるのか、それをまず確認することが重要であろう。

違い・区別 distinction とその言説の関係についても状況は複雑である。区別が必ずしも言説

に先立つと訳ではない。区別は先にあることもあるし、言説によって産出されることもある。当論文で問題としたのは、ある区別が、同時期に別方向に向かって産出されたということである。しかしこの方向の異なる言説を重ねることによって明らかになるのは、区別が立ち現れ、それに対して言説が対処しなければならないという状況であった。この区別それ自体への着目は、区別を言説から全く切り離して扱うことが可能になることを意味しているのではない。逆に区別は、その言説との関係を抜きにしてはあり得ないものであることを同時に示すことでもあった。しかし18世紀に、民族と呼ばれるようなある区別が多様な形で語られたことは確かである。それは、この区別が言説によって産出されたにすぎないそれこそひとつの産物として片付けられるものではないことを示すものであり、区別そのものを思考する可能性を考察する一つの例ということになる。

(よしだ こうたろう・東京外国語大学大学院博士前期課程)